

イーミックとエティックでつなげる国際看護

多文化理解は看護の発展にどのように寄与するか

Bridging Global Nursing through Emic and Etic Perspectives
How Multicultural Understanding Contributes to the Development of Nursing

桑野紀子

Noriko Kuwano

大分県立看護科学大学

Oita University of Nursing and Health Sciences

世界的に相互依存が加速するグローバル社会では、関心の対象を世界中の人や事象に拡大する必要に迫られる。看護ケアはそもそも国籍、言語、人種、宗教的・精神的信条等によらず全ての人を対象としたものであるため、看護職は、周囲の対象者への関心を、世界中の人々への関心へと飛躍させ、職能集団としてコスモポリタンの姿勢を持つ必要がある。こうした姿勢をはぐくむうえで、また、日々のより良いケアのために、イーミック (emic) とエティック (etic) という視点が有用であると考え、学術集会テーマを設定した。端的に言えば、イーミックとは、その地域の人々の内部的な視点であり、エティックとは、地域の外側からの視点で、ある事象を客観的あるいは科学的に考えることである。Leininger は、言語学者・文化人類学者であった Pike の概念を取り入れ、人々の文化を理解しケアするためにイーミックとエティックの視点、相対的視点が重要であると述べている。

人は違いに対しては慎重になりがちであるが、日本人はその傾向が強いという見解もある。日本人と異なる文化・社会・言語背景をもつ対象者の看護について、日本人看護師の専門職としての自律性を測定した研究では、日本人患者を看護する際と比べ、外国人患者を看護する際の自律性が有意に低くなっていた。このように、違いに対する不安や苦手感は、看護ケアにおける自律性を低下させる可能性がある。基礎教育の時点から、イーミックとエティックの視点を意識的に持つことは、自分と相手の差異を相対的に見ることにつながり、自分と文化・社会・言語的背景が異なる対象者の事例の読み解きやケアに役立つと考える。

人はそれぞれ異なるドクサ (doxa, 人の周囲にあるあらゆる文化的なもので、あまりに見慣れているためそれが当たり前のことだと考えてしまうもの) をもつといわれる。看護職は、自分の所属する社会のドクサがどのようなものかを知っておくことが重要であろう。そのうえで、意識的に努力して日本と異なる背景をもつ対象者のドクサがどのようなものかを知る必要がある。日本に暮らす在留外国人を対象とした看護を考える場合、在留外国人は日本人のもつドクサに寛容であることが想像できるが、私たちも相手のドクサを理解して寛容になることが求められる。海外での看護活動の際には、より意識的な理解、感受性と寛容が求められるだろう。

イーミックとエティックの視点をもつことは、自己の文化や知識への唯一絶対的な見方や過信を手放し、相対的視点や、自他へのフラットな見方を獲得することにつながる。発展して、自らを職業的倫理観に基づいたコスモポリタンの存在であると認識できるのではないかと期待する。看護職が自らに対してそうした認識をもつことができれば、専門職集団としての倫理的側面・哲学的側面はさらに深まり、看護の発展に寄与することができると思う。